九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Lung adenocarcinoma may be a more susceptive subtype to a dendritic cell-based cancer vaccine than other subtypes of non-small cell lung cancers: a multicenter retrospective analysis

髙橋, 秀徳

https://hdl.handle.net/2324/1806861

出版情報：九州大学, 2016, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

（別紙様式２）

氏　　名	髙橋　秀徳
論　文　名	Lung adenocarcinoma may be a more susceptive subtype to a dendritic cell-based cancer vaccine than other subtypes of non-small cell lung cancers: a multicenter retrospective analysis
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　二宮　利治 副　査　　九州大学　　教授　　前原　喜彦 副　査　　九州大学　　教授　　吉開　泰信

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

非小細胞肺癌は全肺癌患者の約 85%を占め、手術不能もしくは術後再発例における生命予後は非常に悪いため、新たな治療法の開発が強く求められている。　樹状細胞（DC）は強力な抗原提示細胞であることから、肺癌を含む進行癌に対して、DC ワクチンを用いた臨床試験が世界中で行われている。

本研究では、「J-SICT（Japanese Society of Immunotherapy and Cell Therapy）DC（Dendritic Cell）Vaccine Study Group」に所属する 6 つの医療機関で DC ワクチン治療を受けた進行期・非小細胞肺癌患者 260 例において、生存期間に影響を及ぼす因子の検討を行った。その結果、ワクチン投与部位における発赤反応陽性者（長径 30mm 以上）は、陰性者に比べワクチン投与開始時点からの生存期間が有意に長かった。さらに、同様の関係は肺癌の病型別の検討においても認められたが、発赤反応陽性者における生存期間は、腺癌群のほうの非腺癌群より有意に長かった。また、発赤反応陽性者の頻度も肺腺癌群において有意に高かった。

以上の成績は、ワクチン投与部位における発赤反応が、進行期・非小細胞肺癌、なかでも肺腺癌の患者に対する DC ワクチンの臨床的効果を判定する上で有用であることを示唆するものであり、この方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず論文の研究目的、方法、実施成績などについて説明を求め、各調査員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した自供について種々の質問を行ったが、いずれについても概ね適切な解答を得た。よって、調査委員合議の結果、試験は合格と判定した。